

クルドの農業と農民 <その3>

野菜栽培とグリーンハウスの普及

クルドでは乾燥し、かつ昼夜の寒暖のある気候を生かしながら、これまで露地での野菜栽培がおこなわれてきた。主要な野菜は、トマト、キュウリ、スイカ、メロン、タマネギ、キャベツ、ナスなどである。街の食堂でも、新鮮な野菜サラダは非常にうまい。露地野菜の栽培期間は、大きくは5月から11月で水路からポンプで水を汲み上げ、導水路で圃場に灌水している。農地は不規則に仕切られた区画に、いろいろな野菜が所狭しと栽培されていた。



露地野菜栽培;農地は不規則に仕切られている。

農民の話では、地方での野菜生産の問題としては、出荷場所がないこと、流通業者が国内で育っていないことらしい。生産野菜は集荷後出来るだけ早く消費地まで持っていく必要があるが、そのような販売業者がいない。収穫時期が集中する生産物を如何に、大消費地までもっていくか輸送ルート確保の必要性を農民から聞かされた。また、クルドの野菜栽培にとって、節水と品質の向上が重要な課題である。周辺国(トルコ、イラン)からは安価な、かつ高品質の野菜が輸入され、これと競合する。しかし品質の劣る国内産は劣勢にある。このため、クルド地方政府は野菜生産物が大量に出る時期には野菜の輸入制限をおこなったりもしている。

このような問題もあり、クルド地域でも最近、野菜の品質向上と生産拡大を目指し、グリーンハウスによる集約的野菜栽培が導入されている。しかし、その歴史は非常に浅い。地域の農業資材店で聞いたところでは、2007年に初めてグリーンハウスが導入された。そして、2010年までにクルド



急速に進む急速に導入が進むグリーンハウス;ビニールの一部を開放し換気をおこなっている。

全域で4,000-4,200棟が設置されており、中心はSulaimania県である。この資材店でも本年はErbil県内に130棟を販売している。しかし急速に普及してきているグリーンハウス栽培も、利用面から見ると現在もまだ導入期にあると言っていいであろう。グリーンハウスの資材はおもにレバノン製で、幅9m奥行き50mの施設がおおく見られる。湾岸諸国で見られるような気化熱を利用した冷却装置はない。換気は手動式でビニールの一部を開けておこなわれている。湿気を気にするグリーンハウス栽培では、病害虫管理も重要である。また、グリーンハウス内が平坦化されておらず、ドリップ灌漑は定量の水を各ノズルから出すのは困難そうである。簡単な技術改善によって収量増加も可能であると見受けられた。



不均平な中でドリップ施設設置;定量の水を各ノズルから出すのがむずかしい。

政府もグリーンハウスの導入には積極的で、農業普及の大きな柱になっている。農家にグリーンハウスを無償で供与し、栽培指導・普及活動試験をおこなっている。また、グリーンハウス資材会社も、技術指導(苗の販売、灌水量、液肥の混入割合、栽培法、病害虫防除)をおこなっている。農業研究機関でもグリーンハウスでの栽培試験で、生産と技術改善の研究をおこなっている。

しかし、問題もおおい。試験研究機関への聴き取りで、試験栽培の収量データさえ出てこなかった。農家でも同様な質問に対し、明確な答えを出した農家は1戸だけであった。農家経営を考えた場合、投資額と収益(生産量と販売価格)とのバランス計算は、今後の設備拡大のために重要である。さらに別の問題として、連作障害の発生が懸念される。前述のようにグリーンハウス導入後、月日が浅いため現状では大きな連作障害は認められない。また、農民も連作障害に対する認識を持っていない。ある企業系の大型グリーンハウスを数十棟もっている技術者でさえ「ここは毎年トマト栽培で、これが良いんだ」と胸を張った返事が返ってきた。一方、政府の研究者は連作障害に対する強い懸念を持っている一方で、対策について十分な知識を持っていない。ぜひとも、日本の連作障害対策を教えてくださいと言われたほどである。